

平成6年7月28日

## 下肢の痛みとしびれを主訴とした 錐体路徴候を有する症例

### 症例報告

出端昭男

症例 I. H. 60歳 女 主婦

初診 平成5年11月5日

主訴 両下肢のしびれ、右下腿外側の痛み

現病歴 2カ月くらい前から右下腿外側と左足部にジワジワとしたしびれを感じるようになった。症状は初め間欠的であったが次第に持続的となり、ほとんど1日中しびれるようになったので10月初旬、Y病院整形外科を受診した。診察の結果、右膝関節が悪いと言われ、右膝のレ線写真を撮られ、入院を勧められた。

しかし症状は左にも感じられたため診断に疑問を抱き、今度はK病院整形外科を受診した。この病院で腰部のレ線検査とMRIを行った結果、腰椎に骨棘があると言われ、牽引を指示され今日まで継続してきた。しかし症状は次第に増悪し、最近は夜間に右下腿外側の痛みと両足部のしびれが強く何回も目が覚めるようになった。

膀胱直腸障害はなく、ほかに特記すべき症状もない。

既往歴 23歳のとき肺炎に罹患し、その後、1年おきに2回再発した。このとき輸血を行っている。

また、30歳のときギックリ腰となり、医師に椎間板ヘルニアと診断され、約1カ月入院して牽引と硬膜外ブロックを受けて緩解した。

家族歴 特記すべきものなし

診察所見 膝蓋腱反射は両側とも著明に亢進、バビンスキー反射も陽性。足部の触覚障害は陽性で、両足背部全体に著しい鈍麻が認められる。

上腕二頭筋、腕橈骨筋、上腕三頭筋の各反射は正常。腰椎の前屈、後屈、側屈で愁訴の増悪は認められない。

総括 膝蓋腱反射亢進とバビンスキー反射陽性の所見から錐体路障害が推定できる。障害部位は上肢腱反射正常の所見から胸髄以下と推定されるが、病態は全く推測し得ない。

錐体路障害の原因疾患は、ほとんどが鍼灸不適応疾患と考えられるので精査を勧めた。

対応 Y病院で膝が悪いと診断されたようですが、あなたのしびれと痛みは膝が原因ではありません。

K病院では痛みとしびれの原因を腰椎の骨棘と診たようですが、私は脊髄に何か病気があると診ます。私が簡単な紹介状を書いてあげますから、どこか大きな病院の神経内科へ行って診てもらってください。

ちなみに紹介状の内容は下記の通り。

「下肢の痛みとしびれ感を訴えて来院した患者ですが、膝蓋腱反射が著明に亢進し、バビンスキー反射も陽性です。鍼灸は不適応と考えられますので、何卒ご高診ご加療賜りたくお願い申しあげます」

その後の経緯

患者は再びY病院へ行き、今度は神経内科を受診した。そして諸検査の結果、担当医から次のような報告が送られてきた。

「ご指摘の通り痙攣性対麻痺です。HTLA-PAが高値であり、HTLV-I associated myopathy (HAM) です。以前の肺炎の際の輸血が原因となっていると思われます。ただし、painfulなので入院のうえ加療します」

その後、3カ月ほど経過した2月11日に、患者から経過報告の電話があった。以下は患者の報告である。

「11月10日から約1カ月間、Y病院神経内科へ入院して治療を受けましたが、症状不变のまま退院しました。その後は病院からもらった薬を内服していますが全く効果がみられません。最近では両下肢に痛みとしびれを感

じるようになりました、歩行がつらくなってしまった。近いうちに紹介でK大学病院の神経内科を受診します」

3月30日、患者は2回目の経過報告のため来院した。報告内容は以下の通り。

「K大学で精査の結果、やはりHAMでした。しかし、有効な治療法はないとのことで、現在なんの治療も行わず経過観察中です。症状はさらに悪化しており、痛みのため歩行が大変に困難です」

考 察 バビンスキー反射陽性の所見から、錐体路障害によるものと推定し、要精査疾患と判断して検査を勧めた。

検査結果からHAMによる痙性対麻痺という診断であったが、主訴は疼痛と感覚異常で、対麻痺症状は前面に現れていなかった。鍼灸臨床で本症の確定診断は不可能であるが、錐体路障害の原因疾患は大部分が難治性疾患であり、鍼灸の適応は少ないと思われる。したがって要精査疾患としての処置は妥当であったと考えられる。

なお、錐体路徵候を有する脊髄疾患を鍼灸臨床で扱う場合、ベッドサイドで実行できる診察所見から、その病変部位を推定し、ときには病態を推測することが可能なケースもある。それには以下のような診察が必要である。

筋トーナス、筋力低下、痙性歩行、深部反射（顔面、上肢、下肢の反射）膝間代、足間代、感覚検査（触覚、痛覚、温度覚、振動覚、位置覚、2点識別感覚など）

しかし、錐体路障害の原因疾患は、大部分が要精査疾患であるため、實際には錐体路徵候の有無を検索するだけで十分と思われる。

#### 主要参考文献

荒木淑郎著：「神経内科学」、金芳堂、1991.

水野美邦編集：「神経内科 Quick Reference」、文光堂、1992.

川村純一著：「神経病学入門」、金芳堂、1988.

平山惠造著：「神経症候学」、文光堂、1976

医学大辞典：南山堂、1993.